

# 『文学論』から「文芸の哲学的基礎」へ

—ロイド・モーガンおよびウィリアム・ジェイムズとの関わりを中心に(II)

塚 本 利 明\*

## 目次

1. はじめに
2. 「文芸の哲学的基礎」と『文学論』の間には「革命的变化」があるか
3. 漱石とジェイムズとの接点——ジェイムズにおける「暗示」と「自由意志」  
とを中心に
4. ジェイムズは「暗示」を全否定したか
5. 『文学論』は「ある程度の自由」を認めていないのか——「第五編第二章意  
識推移の原則」再考
6. 『文学論』の「意識」理論はスペンサーの影響下にあるのか（以上前号）

## 7. 『文学論』におけるモーガンの露頭

では、『文学論』が採ったモーガンの理論は、「意識の波」の部分だけなのだろうか。『文学論』におけるモーガンへの直接的言及は、大別すれば2カ所に過ぎない。その一は右に指摘した部分と、それに続けて「吾人の意識的経験と称する（中略）心的波形の連続」を「Morgan 氏式をもって」示した部分とである。その二は「第二章文学的内容の基本成分」において、「同感」は「恋の根本なる両性的本能と全く絶縁して存在する」とし、そ

---

\*専修大学名誉教授

の論拠をモーガンの *Animal Behaviour* (chapter v) に求めたところである。だが、モーガンへの直接的言及がなくても、モーガンを踏まえていると思われる事例を見いだすのはそれほど困難ではない。以下、モーガンの露頭と見られるものをいくつか指摘してみよう<sup>1)</sup>。

その一は、「第三編第一章文学的 F と科学的 F との比較一汎」の冒頭である。この章は、「凡そ科学の目的とするところは叙述にして説明にあらずとは科学者の自白によりて明かなり。語を換へて言へば科学は“How”の疑問を解けども“Why”に応ずる能はず、否これに応ずる権利なしと自認するものなり」と始まっている。そもそも自然科学が哲学から独立するにいたった契機の一つが、“Why”に関わる問題を捨てて“How”の問題に集中してきたことなのだから、この言葉は当時としても常識に過ぎなかったのだろう。ただ、漱石がこのような知識を得た主要な源泉の一つがモーガンだったこともまた、疑い得ないのである。

『比較心理学』第九章は「総合と相関関係 (SYNTHESIS AND CORRELATION)」と題され、複数の刺激が合成されて一つの印象になる過程を扱っている。我々が数フィート離れたところにある煉瓦のような物体を見るとき、一つの明確な印象を得る。ところが実際は、我々は二つの眼で対象を見ているのである。そのとき、左目が見る様相は右目が見る様相と完全には同一ではない。ところが、この微妙に異なった二つの様相を脳が結合すると、そこに生まれるのは二つの輪郭が重なりあって多少ともぼやけたものの印象ではなく、きわめて明確な一つの印象なのである。モーガンは、これを「総合的結合 (synthetic combination)」と呼ぶ。モーガンは更に続ける。

If it be asked *why* the synthetic combination gives rise to this new quality in the psychical product, we must reply that we do not know. We know practically nothing concerning the ultimate “*whys*” of conscious-

ness, though we know a little concerning the proximate “*whys*” and the “*hows*”. We do not know why rays of a certain vibration frequency give the sensation red, while rays of another vibration frequency give the sensation green. We do not know *why*, when there are combined upon the retina the rays which give the sensation red with the rays which give the sensation green, we get a quite new sensation different from both, which we call yellow. So, for psychology, visual distance and solidity, the third dimensional space element, appears to be an ultimate element. We may explain, or try to explain, psychologically *how* it is generated, but *why* it takes this form we cannot say.<sup>2)</sup> (イタリックは塚本, 下線は漱石)

引用部分は、一見して明らかなように、“How”と“Why”との対照から構成されている。引用文中の下線は全体の中で漱石が最も注目した部分を示しているが、その直後、すなわち「それがどのようにして (how) 生みだされるのかを心理学的に説明すること、あるいは説明しようとすることはできるが、それが何故 (why) そういった形をとるのかは言えないのだ」という一節を、漱石が見逃したはずもあり得まい。「科学は“How”の疑問を解けども“Why”に応ずる能はず」という一節は、モーガンの言葉を殆どそのまま借りているかにも見える。『文学論』は続いて「否これに応ずる権利なしと自認するものなり」と述べるが、このように「自認」した科学者の中には疑いもなくモーガンが含まれている。

次に、「第四編文学的内容の相互関係」に移ろう。ここでは、「文学者」が「一種の幻惑を喚起してそこに文芸上の真を發揮」するための「手段」が論じられる。この「手段」を扱うには従来「修辞学なるもの」があったが、これは「徒に専断的の分類に力を用ゐ」るのを主眼としたため、「その効著しからず」と、『文学論』は述べる。そこで『文学論』は、「凡そ文

芸上の真を發揮する幾多の手段の大部分は一種の『觀念の聯想』を利用したるものに過ぎず」という立場から、「投出語法」以下「対置法」にいたる六種類の方法を「組み立てた」のである。これ以外には「写実法」と「間隔論」とが加えられているだけだから、「觀念の聯想」は「第四編」における支配的原理の一つだということになる。

「觀念の聯想 (association of ideas)」とは、17世紀以降イギリスにおいて多くの連合心理学者が唱えたもので、哲学的認識論と重なり合う側面もっている。彼らの主張を一言で要約すれば、神が人間に与えた「本有觀念 (innate ideas)」なるものを全否定し、一切の知識は人間の経験に起源をもつとするものである。人間が最初にもつ経験は「感覺 (sensation)」であるが、感覺は「觀念 (ideas)」を生み、さらに、觀念は「聯想」または「連合」(association)によって整理・統合され、その結果、体系的な知識が成立するというのである。「觀念の聯想」については多くの哲学者や心理学者の発言があり、また、『文学論』に言う「坊間に行はるゝ通俗の修辞学」も、修辞法の理論的根柢を「觀念の聯想」に求めることが多かった<sup>3)</sup>。したがって、『文学論』が「觀念の聯想」と言うとき、その源泉をモーガンのみに求めることはできまい。だが、漱石文庫に残されたモーガンの著書を一瞥すれば、モーガンが漱石に最も重要な示唆を与えた一人であることが明白になる。

ここで先ず注目すべきは、『比較心理学』「第四章暗示と連合 (SUGGESTION AND ASSOCIATION)」中、特に「連合」について論じている部分である。23頁にも及ぶこの章には至るところに下線や書き込みが見られるが、ここでモーガンは多くの事例を挙げてそれらを分析し、以下のような「連合の法則」を提示する。

As the result of such analysis certain laws of association have been formulated. As generally accepted they are two— (1) association by conti-

guity, and (2) association by similarity; to which, as subsidiary, is sometimes added a third, (3) association by contrast.<sup>4)</sup> (下線は漱石)

「このような分析の結果、ある種の連合の法則が定式化されるに至っている」というモーガンの言葉からも明らかなように、この部分は連合心理学における通説をモーガンなりに整理したものである。モーガンが「接近による連合」と「類似による連合」とを基本とし、「対照による連合」を補助的なものとするのは、通説そのままである。ところがモーガンは、ここで一歩を進める。すなわち、「類似の法則」の下位区分として、単なる「外見上の類似による連合 (*association by resemblance*)」とは別に、「類似した関係を知覚することによる連合 (*association by perceived similarity of relationship*)」いう概念、約言すれば「関係の類似」という概念を提出する(イタリックは原文、下線は漱石)。しかも、後者は「より広範な範囲に及び、また、はるかに微妙な性質をもつところの、より複雑な事例(certain more complex cases of far wider range and of a far subtler nature)」に妥当するとしたのである<sup>5)</sup>。

その一例として、モーガンはP.B.シェリー(1792-1822)の傑作“Ode to the West Wind”から2行を引用する。

Drive my dead thoughts over the universe

Like withered leaves, to quicken a new birth, —<sup>6)</sup> (下線は漱石)

この詩は、1819年シェリーがフィレンツェ滞在中、アルノ河の岸辺に近い松林で、まさに襲来しようとしている嵐に靈感を受けて創作したとされている。英詩には稀な“terza rima”というイタリア式の押韻法を用い、“O Wild West Wind, thou breath of Autumn’s being,” に始まる十四行詩(ソネット)を第一節とし、全五節から構成されている。その最終行を飾

るのが、“If Winter comes, can Spring be far behind?”という有名な詩句である。右の引用部分はこの詩の第五節第七行から八行で、詩人は秋風にむかって、「新しく生まれるものに力を与えんがため、沈滞し枯死せんとする我が思想を、枯葉と同じように、天地万物の上に撒き散らせ」と呼びかけている。

この2行についてモーガンは大略以下のように述べる。ここで詩人は“dead thoughts”を“withered leaves”に喩えているが、両者の類似は外見上決して明白とは言えず、むしろ両者を個別に取り上げれば全く類似性がないと言えよう。ところが、似ても似つかぬ両者が詩人の「想像的洞察力 (imaginative insight)」によって「類似性を与えられる (assimilated)」のである。一般に、偉大な詩人の「比喩的表現や比喩的イメージ (metaphors and imagery)」は、この種の微妙な連想に満ちている。天才的知性のかかる微妙な閃きは、2個の焦点的観念の単純な類似をはるかに超えたところに関わっている。この場合、類似性は焦点的観念 (focal idea) そのものにあるのではなく、それらの観念がもつ諸関係にあるのだ。この例では、枯葉が新しく生まれる植物の豊かな土壌となることが、沈滞し枯死しようとする思想が新しい思想を生む母胎になることに類似しているのである。換言すれば詩人は、「枯葉」が「新しく生まれる植物の豊かな土壌を作る」という「関係」と、「我が思想」がたとえ枯死しても「新しいもの」を生む母胎になるという「関係」との間に類似性を与えているのであり、かくして「枯葉」が「沈滞し枯死しようとする我が思想」の比喩になるのだ、とモーガンは説くのだ<sup>27)</sup>。

引用部分で示したとおり、漱石は“Ode to the West Wind”の一部、すなわち“dead thoughts”と“withered leaves”とに下線を引いている。漱石は、詩人がこの両者のもつ「関係」を通して両者に類似性を与えたとするモーガンの説に注目しているのである。

モーガンはこれを出発点とし、さらにシェイクスピア、キーツ、テニソ

ン等々を引用しつつ、「関係の類似」という自己の理論を補強する。次いで彼は、「一時的 (transitory)」な「気分 (mood)」と「比較的变化しない (relatively permanent)」ところの「気質 (temperament)」との考察に移り、詩的な気質は多くの点において科学的気質とは異なるが、また、両者共に単なる散文的気質とは異なるとする。散文的な人にあっては接近による連合が最も優勢であるが、詩人においては類似による連合が有り余るほどに豊かだからである<sup>8)</sup>。かくしてモーガンは、詩人における類似連合を強調し、しかも表面的な類似を超えた「関係の類似」という視点を導入したのである。モーガンがこのように主張している部分には、多くの下線が引かれている。

以上の点を踏まえた上で「第四編」を通読すると、『文学論』とモーガンとに共通するところが少なくないことに気がつく。先ず、『文学論』の言う「文芸上の真を発揮する手段」の多く（「投出語法」、「投入語法」、「自己と隔離せる聯想」、「滑稽的聯想」および「調和法」）は、接近による連合ではなく類似による連合、モーガンが特に詩人において豊かだとした類似による連合に拠っている。

次に、モーガンが強調した「関係の類似」は、『文学論』では独立した事項として挙げられていないにも拘わらず、それぞれの「手段」の内部では大きな比重をもっている。これが、『文学論』と「通俗の修辞学」との大きな落差の一つなのである。例えば「投出語法」とは、「自己を投出 (project) して外界を説明する」手法で「所謂擬人法」等を含むとされる。『文学論』はその一例として、ハーディ (1840-1928) の代表作『テス』(1891) 第三十章の一部を引用し、これを「成功せるものなるべし」と評している。テスがクレアとの結婚前夜、クレアが自分の過去を打ち明けたのを受けて、自らの過去を告白する場面である。ところが彼女の告白が進むにつれて、「外界の事物の顔色まで (the complexion even of external things)」が「変わっていく (suffer transmutation)」ように思えてくる。「暖炉の火 (the fire

in the grate)」は小鬼のように悪戯っぽい表情になり、彼女の苦しみなどまったく気にもかけていないように悪魔じみたふざけ方をした。「炉格子 (the fender)」も、自分だってそんなことは知らないよというふうには、齒をむき出して笑った。「水差しから反射する光 (the light from the water-bottle)」は、テスのことなど気にもかけず、自分の色彩のことだけに専念していた。「周りにある物は全て (all material objects)」しつこいほど何度も繰り返して、自分たちには責任がないと宣言したのである。

様々な「外界の事物」が「悪戯っぽい表情」になったり、「笑った」り、「宣言した」りする以上、ここに一種の擬人法が用いられていることは一目瞭然であろう。だがこの擬人法は、「抽象的言語を具体化する一手段として、これらに（中略）大文字を冠し、一見固有名詞の如く見せかくる」ようなものではない。例えば、「神々しく憂いに満ちた『冥想』が住まっているところの (Where heavenly-pensive Contemplation dwells)」といった18世紀的擬人法とは、まったく異質である。テスには、「周りにある物全て」が自分に示す態度が、クレアの自分に対する態度ないし眼差しそのものに思えてくるのである。自分の告白が進むにつれてクレアの顔色が「変わっていく」ように思えるが故に、「外界の事物の顔色」までが「変わっていく」ように感じられるのである。換言すればハーディは、クレアのテスに対する態度という「関係」と、「周りにある物全て」のテスに対する態度という「関係」とに「類似性を与えた」のである。これはまさに、モーガンの言う「関係の類似」ではないか。『文学論』が「所謂擬人法又は prosopopeia 等」の伝統的名称を踏襲することなく、これを拡張して「投出語法」とした背後には、モーガンが潜んでいる。

そればかりか、『文学論』に見られる「関係の聯想 (傍点原文)」という表現の背後にも、モーガンの言う「関係の類似」が潜んでいるのではないか。「関係の聯想」とは「第四章滑稽的聯想」に見られる表現で、海亀を喜ばせようとして亀の甲羅を撫でていた少年に、シドニー・スミス (1771



-1845) が「そりゃセント・ポール大聖堂の祭祀長を喜ばせようとして大聖堂の円屋根を撫でているようなものだよ」と言ったという笑話の解説に用いられている。『文学論』は、この効果を「物と物との聯想にあらず。二物間に存在する關係と他の二物間に存在する關係の聯想なり（傍点原文）」と述べる。「二物間に存在する關係と他の二物間に存在する關係」とは、まさしくモーガンが強調した「關係の類似」に他ならない。「滑稽的聯想」にもまた、モーガンの理論が影を落しているようである。

また「第五章調和法」はこう述べる。すなわち、「滑稽的聯想」とは「類似の連鎖を通じて非類似のものを聯想するもの」だが、これを「布衍すれば次章に論ずべき対置法となる」と。「対置法」は「対照」による連合を利用するとされることが多いが、『文学論』はこれを「類似の連鎖」を「布衍」したものだとするので、これもまたモーガンに近い。モーガンは、「対照による連合」の原理をも主として「類似による連合」に求めているのだ。「巨人は侏儒を連想させ、美は醜を、美德は悪徳を連想させる」が、両者は「正常な人間の水準から異常に逸脱したものであるという点で相似している」のであり、ここには「關係の類似がある」というのである<sup>9)</sup>。つまりモーガンは、「対照」（あるいは「対置」）を「類似」の変型ないし特殊型だと捉え、しかもここには「關係の類似」があると説くのだ。『文学論』にモーガンの露頭があると思われるのは、この種の例が少なからず見いだせるからである。

## 8. ロイド・モーガンの略歴と学説

『漱石全集』第十四卷（岩波書店、2003年）「注解」は、ロイド・モーガン（1852-1936）について、「イギリスの動物学者・心理学者。ブリストル大学教授。進化論の影響下に動物の心理を研究し、比較心理学の先駆と

なった。*An Introduction to Comparative Psychology* (1894) (『比較心理学』) は漱石文庫蔵」と述べる。他の「注解」に見られるモーガンの解説も、大同小異と言ってよからう。要点を網羅した紹介ではあるが、モーガンにはこれ以外にも注目すべき点が多々あるので、この特異な心理学者の経歴について簡単に補っておきたい<sup>10)</sup>。

モーガンの幼年時代の教育についてはよく知られていない。だが、彼が学んだギルドフォードの「ロイヤル・グラマー・スクール」は古典教育を中心とし、ある程度の数学以外には理科教育は行なわなかったらしい。しかしモーガンは早くから理科に興味を示し、父が鉱山関係の仕事に携わっていたこともあって、その後ロンドンの鉱業学校 (School of Mines) に入学、鉱山学と冶金学とを修めた。卒業後、シカゴの裕福な家庭で個人教師をつとめたが、このとき広く北米から南米を旅行し、この間次第に純粋科学に惹かれていったらしい。帰国後、王立科学専門学校 (Royal College of Science) に入学、ここで進化論者 T.H.ハックスリー (1825-1895) の指導を受けつつ生物学を学んだ。

この時期、いくつかの学校で非常勤講師等を経験し、卒業後の1878年、初めて南アフリカのローンドボース (Rondebosch) の教区専門学校 (the Diocesan College) で正規の教職に就いた。自然科学一般のほか、英文学をも教えたという。1884年帰国、ブリストルのユニヴァーシティ・コレッジで地質学と動物学との講座を担当、3年後にこの専門学校の校長に任命され、講座をもちながら校長の職務を果たした。1910年、専門学校が大学に昇格すると同時にモーガンは副学長に選ばれたが、3年後には教授職に復帰、1919年に退職するまで心理学と倫理学との講座を担当した。後にこの講座は哲学科となり、モーガンは退職後もここで一時哲学の講義を担当する。また1902年と1903年とは、セント・アンドルーズ大学でギフォード講義を担当し<sup>11)</sup>、これらの講義はそれぞれ *Emergent Evolution* (1923) および *Life, Mind and Spirit* (1926) として出版された。モーガンはきわ

めて精力的な著作家でもあって、1876年から1934年までの間に彼の著書が発表されなかったのは、1918年だけだったという。

モーガンは、当時「精神の進化 (mental evolution)」の分野では第一人者と目されており、動物心理学の科学的研究に実験的方法を導入した先駆者だった。1899年、王立協会 (the Royal Society) の会員に選出されたが、心理学の分野から王立協会の会員に選ばれたのは、モーガンを嚆矢とする。またモーガンは、「いかなる場合でも、動物の行動が心理学的階梯においてより低次の心的能力を行使した結果だと解釈し得るときは、その行動をより高次の能力を行使した結果だと解釈することはできない」と主張したが<sup>12)</sup>、これは「ロイド・モーガンの原理 (Lloyd Morgan's canon)」として未だに認められている。

モーガンはまた、「試行錯誤 (trial and error)」による「学習 (learning)」が行なわれるところには例外なく知性の萌芽が見られる、とも述べる。つまり、動物は知性の萌芽をもつとするのである。*Encyclopedia of Philosophy*, Vol. V (Collier-Macmillan Ltd., 1967) によれば、「試行錯誤」はモーガンの造語である<sup>13)</sup>。漱石手拓本にも、“The method employed here is that of *trial and error*.” (イタリックは塚本) という言葉があって、これに続く “It is a vitally important matter in the psychology of animals, and involves the selective activity of intelligence.”<sup>14)</sup> には、ここに示したように漱石の下線が引かれている。動物の「試行錯誤」は、彼らが複数のものから何かを「選択」するという知的活動をしていることを意味する、とモーガンは考えるのだ。モーガンに精通していた漱石が、人間に「『ある程度の自由』と『幾分か選択の余裕』がない」などと考えた可能性はあるまい。

「選択的 (selective)」という概念は、モーガンにおいてきわめて重要である。この語は、『比較心理学』では早くも冒頭の「緒論 (prolegomena)」で一種のキーワードとして用いられているのだ。すなわち、「自然界全体を支配する進化においては、その過程は全面的に以下の三つの特徴をもつ

ている。すなわち、(一) それは選択的である。(二) それは総合的である。(三) それは混沌から秩序へと向かっている」というのである。この部分で漱石は、“(1) It is selective; (2) it is synthetic; (3) it tends from chaos to cosmos.” のそれぞれに、ここに示したように下線を引いている<sup>15)</sup>。

これらの概念については、「第十七章主体と客体 (SUBJECT AND OBJECT)」で詳しく敷衍されるが、強いてこれを要約すれば、次のように言えよう。われわれが「自己 (self)」について内省を深めれば、我々は「様々な状態の意識の連続 (a sequence of states of consciousness)」以上のものを持っているという事実に気づかざるを得ない。それは、「[対象から] 選択しかつ [選択したものを] 総合する活動が存在する」という事実である。このような「活動」は意識の本質的特長であり、この「活動がなければ、主体は様々な感覚に統一性を与えるべきものを持たず、また、それらの感覚の意味を理解して一つの全体像に纏め上げるものをも持たないままに、支離滅裂な感覚の連続に墮してしまう」と言うのだ<sup>16)</sup>。換言すれば、意識は選択と総合とを通して統一的秩序に向かうとするのである。

モーガンによれば、「意志 (*Will*) (イタリックは原文)」という言葉も、本来、主観的側面 (つまり「我」という側面) に「内在するこの選択的かつ総合的活動」を指すべきものだという。ここで漱石は、本文中の“*Will*”に下線を引き、なお欄外にも“*Will*”という書き込みを残している<sup>17)</sup>。

漱石は、留学以前に著わした「トリストラム、シヤンデー」(明治30年)で、この作品の登場人物は「皆自家随意的の空気中に生息して、些の統一なき事、恰も越人と秦人が隣り合せに世帯を持ちたるが如く、風する馬牛も相及ばざるの勢」だとした。彼らがこのような混沌の中で「生息」しているのは、それぞれが独自の「奇想」、すなわち他者には理解できない独自の連想の中に生きているからである。『トリストラム・シヤンディ』の世界に独特の滑稽を見いだしていた漱石は、右に引用したモーガンの言葉にも注目したであろう。

モーガンはさらに進んで「選択的」と「総合的」という概念を結合し、「選択的総合 (selective synthesis)」という概念を提出する。モーガンは言う。「この選択的総合——不可解な『原理』としてではなく、観察された事実から導かれる当然の結論としての総合——が現実中存在することを明らかにし、かつこの選択的活動が決して精神の領域に限定されることなく、自然におけるあらゆる既知の面に普遍的であること、あるいは共通していることを示すのは、私の義務である」と<sup>18)</sup>。かくしてモーガンは、無機物の世界から人間の精神活動にいたる一切を「選択的総合」によって説明しようとするのだ。

次いでモーガンは、「自然の一次的・内在的法則 (primary intrinsic laws)」と「二次的・外在的法則 (secondary extrinsic laws)」とを区別する。例えば「炭素が硫黄と結合しようとする傾向は一次的・内在的法則によるものであり、それらが結合するとき、その結合が自由の典型である」と言う。これを多少敷衍すれば、炭素と硫黄とは相互に相手を「選択」し、「結合 [= 総合]」しようとするが、この両者が「結合」したときに「自由」が実現される、ということになる。モーガンは続ける。「自然に内在する傾向が何ものにも妨げられることなく実現する全ての場合に、我々は自由という表現を使うべきなのだ (in all cases where natural inherent tendency is fulfilled, without let or hindrance, we should speak of *freedom*.) (イタリックは原文、下線は漱石)」と<sup>19)</sup>。モーガンによれば、これこそが自由の本質なのである。このあたりの欄外には、“Freedom” という漱石の書き込みが残されている。要するにモーガンは、「自由は内在的であるが、あらゆる形式の制約は外在的である。人間も、動物も、結晶も、それが内在的・本来的の性質に従って行動する限りにおいて、自由である。ただ、その行為が周辺の条件という外在的影響によって挫折させられる限りにおいて、それは制約の下にある」と主張するのだ<sup>20)</sup>。自然科学的というよりは形而上学的な響きがあるが、漱石はこのような考えに共鳴しなかっただ

ろうか。

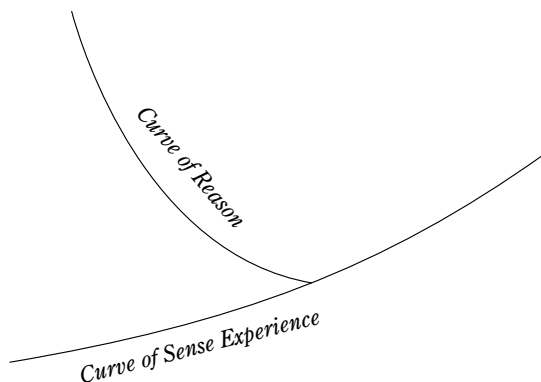
モーガンは、ここから一見奇妙な結論を導く。「決定論と、以上に定義された意味での自由意志との間には、真の意味での矛盾はない」と<sup>21)</sup>。だがモーガンにおける「自由」が右に略述したようなものである以上、また後述するように、主観と客観とは同一のものの異なった側面に他ならないとする立場に立つ以上、これはモーガンにとって当然の帰結なのである。いずれにせよ「総合」の理論は、真の「自由」とは何かという問題に直結している。『文学論』における「断然たる特殊の傾向を有するC」といった言葉も、「本来的・内在的傾向」といったモーガンの言葉と無関係ではあるまい。

モーガンは、無機物を対象とする鉱物学や冶金学から出発し、動物学を経て心理学や倫理学の研究にいたったが、当時としてもこういう経歴はきわめて異例だった。このような経歴から生まれたのが、モーガン独自の進化論である。モーガンはダーウィンと違って、無機物から人間にいたるまで一切の変化を彼独自の進化論で説明しようとしたのである。だが進化の過程は直線的ではなく、時に外見上「断絶 (hiatus)」ないし「ギャップ (gap)」と見えるものを含んでいる。しかし、モーガンによれば、これは断絶というよりは「新しい出発 (a new departure)」なのである<sup>22)</sup>。この理論を支える最も単純な事例を、『比較心理学』から一つだけ紹介しておこう。氷と言われる物質に熱を加えると、ある段階で水と言われる物質に変わり、更に熱を加え続けると、水蒸気と言われる物質に変化する。このとき、固体が液体に、さらに気体に変化すると共に、それぞれの段階で容積も大きく変化する。この変化は連続的ではなく、明らかな断絶を示しているように見える。しかし、これらの変化を通して氷と呼ばれた物質の化学的成分には、いかなる変化もない。同様にして、進化の過程で外見上「断絶」あるいは「ギャップ」と見えるのは、実は「新しい出発」と見るべきだとするのである<sup>23)</sup>。

これと同一の原理が、精神の進化に至るまでの一切の事象に等しく妥当する、とモーガンは考える。これらの過程全てに作用する原動力としてモーガンが想定するのが、本章冒頭に述べた「選択的総合」の作用である。モーガンはこれを「本来選択的かつ総合的であるところの内在的活動 (inherent activities which are selective and synthetic in their nature) (下線は漱石)」とも言い換えるが<sup>24)</sup>、ここに引かれた下線は、「選択的総合」とは本来「内在的活動」なのだというモーガンの考えに漱石が注目したことを示している。

このような理論で、モーガンは無機物から有機物への変化、および有機物から生命の発生へという変化を説明するのである。生命の発生後についても、最下等の単細胞生物からより高等な生物への進化、さらには原始的生物における感覚の発生から高等動物特有の理性の出現についても、すべて同一の原理を適用する<sup>25)</sup>。精神の発達との関連で注目されるのは、モーガンが感覚から理性が出現する過程を図示していることである。すなわち、「感覚経験曲線」はそれ自身のカーブを描きつつ発達していくが、ある時点でそこから「理性曲線」が新しく出発し、両者はそれぞれ独自のカーブを描きながら発展していくとするのだ(図版参照)<sup>26)</sup>。モーガンは、後に「新しい出発」という用語に代えて、「創発体 (an emergent)」という表現を用いるが<sup>27)</sup>、先に触れた *Emergent Evolution* は、この間の事情を反映する書名である。

以上のような意味で、モーガンは「一元論者 (monist)」であり、『比較心理学』冒頭の「緒論」で既にこのことを明言している<sup>28)</sup>。留学中の漱石は、「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其の活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸元素を解剖し其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」(明治35年3月15付中根重一宛書簡) という壮大な目標をもっていた。そ



図版 モーガンが「感覚から理性が出現する過程」を示すのに用いた図。(注26参照)

のためには、「哲学にも文学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係」(同上)する研究が必要だと感じていたのである。このような大問題を抱えていた漱石は、以上に略述したモーガン独特の進化論に、特別な魅力を見出したのではなかろうか。「世界を如何に観るべきやと云ふ論」は、「文芸の哲学的基礎」の出発点でもある。この論文は、「世界は我と物との相対の関係で成立して居る」という考え方に対する疑問から出発しているのである。

なお、モーガンとジェイムズ、およびその他の心理学者との関係について一言しておく。『比較心理学』「序 (Preface)」で、モーガンはスペンサーとジェイムズとに負うところが多いことを強調し、特にジェイムズとの関係については、ジェイムズの「意識の波という概念 (conception of a wave of consciousness) を採用した」と明言している<sup>29)</sup>。厳密に言えばこの言葉は誤りだと思われるが、モーガンが「意識」という用語をジェイムズから採ったことは確実である。とすると、漱石の用いた「意識」は直接にはモーガンに拠るとしても、その淵源はジェイムズにあるとも言えよう<sup>30)</sup>。これを一般化すれば、ある用語ないし問題の源泉を探ろうとしても、それ



を特定の個人に帰するのが困難な場合も少なくないということになる。『文学論』や「文芸の哲学的基礎」の背景を論じるに際しては、この点にも充分留意しなければなるまい。

## 9. 「文芸の哲学的基礎」における「意識の連続」と モーガンの意識理論

「文芸の哲学的基礎」は、大きく三つの部分から成立していると見ることができる。第一部は、冒頭から意識の「分化作用」を論じるあたりまでである。第二部は、「物」と「我」とを分かつばかりでなく「我」を分かち「知、情、意の三」とするあたりから、「四種の理想」と「現代文学」との関係論を論じるあたりまでである。第三部は、文学における「技巧」に移るあたりから結論までである。内容的にはさらに細分することもできるし、また、この分け方では、スペースの上ではやや不均衡を生じるが、本稿では、便宜上以上のように整理しておきたい。

第一部で漱石は、先ず次のように述べる。「通俗」的には、「世界は我と物との相待の関係で成立して」おり、双方共に「空間」の中で「時間」の経過とともに「推移」し、かつこの「推移」は「因果の法則」で纏められているように見える。しかし、「能く々々考へて見ると」、「あるもの」はただ「意識」あるいは「意識すると云ふ働き」だけである。これは「証明する事は出来ない」が、「証明する必要もない位に柄乎として争ふ可からざる事実」である。要するに、「普通に私と称して居る」のは「只意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与へた」に過ぎないのだ、と。これが、第一部の出発点である。

「意識」こそ「私」だとする主張の背後には、複数の思想家を想定することができよう。「思考の流れ」という概念を提唱したジェイムズは、言うまでもない。遡ってルネ・デカルト（1596-1650）を想定しても、あな

がちの外れとは言えまい。『吾輩は猫である』（七）には、「デカルトは『余は思考す、故に余は存在す』といふ三つ子にでも分るやうな真理を考へ出すのに何十年も懸つたさうだ」とあるからである。

だがここでもまた、最も重要なのは疑いもなくモーガンである。「文芸の哲学的基礎」の出発点、すなわち、確実に存在するものは「意識」だけだという主張は、『文学論』の冒頭、すなわち「文学的内容の形式」を論ずるには「溯りて意識なる語より出立せざるべからず」とした部分をほぼそのまま受け継いでいる。その『文学論』が、「意識」ないし「意識の波」を説明するには「Lloyd Morgan が其著『比較心理学』に説くところ最も明快なるを以て、此処には重に同氏の説を採」ったとするのである。とすると、「文芸の哲学的基礎」における「意識」理論も、直接にはモーガンの意識理論を採ったと考えざるを得ない。

これを検証するために、前記『記録・東京帝大一学生の聴講ノート』を検討してみよう。この『聴講ノート』には、『文学論』よりも漱石の肉声を忠実に伝えているところがあって、この問題を解明するための格好な補助線ともなり得るからである。『文学論』は冒頭で有名な「(F+f)の公式を提示し、次いで「fのみ存在して、それに相応すべきFを認め得る場合」として、シェリーの *A Lament* を挙げるにとどめている。ところが『聴講ノート』は、「文学ノ内容(材料)」は「(F+f)の「形ニ reduce サル、ヲ得」とした後、その実例として *A Lament* に加えて『リチャード二世』第二幕第三場の一節を引用する。ここで漱石は、『リチャード二世』第二幕第三場で“queen”が口にする“nameless woe”なる表現に注目し、これは一見「F」の要素を欠くように見えるが、実は読者が暗々裏にこの要素を補っているのだとする<sup>31)</sup>。次いで、「此説明ハ吾人ノ consciousness ノ説明トナルナリ而メ consciousness itself ハ explain シ得サルナリ然レトモ各自究セルモノト見倣シテ此ニ云ハズ」と続ける<sup>32)</sup>。これは『文学論』講義における漱石の肉声だが、「而メ」以下の言葉は、内容的には「文芸

の哲学的基礎」における「意識」の説明にほぼ対応する。「consciousness itselfハexplainシ得サルナリ」を敷衍すれば、「意識」が存在することは「証明する事は出来」ず、また、「是丈けは証明する必要もない位に炳乎として争ふ可からざる事実」だということになる。「文芸の哲学的基礎」の出発点は、事実上『文学論』のそれと同一だと言わざるを得ない所以である。

ところがこの立場は、モーガンの出発点でもある。『比較心理学』第一章「意識の波」は、次の言葉で始まっている。

I do not propose to begin by defining consciousness. Any definition would be found, when analysed, to involve a direct reference to primary experience. I shall therefore assume that my reader has this primary experience; that he is conscious, and that he knows what I mean when I say that he is conscious<sup>33)</sup>.

モーガンは先ず、自分は意識の定義から出発するつもりはない、と言う。意識についてどのような定義を与えても、それを分析すれば人間の「根源的経験（primary experience）」に直接言及することになろう。そこでモーガンは、読者がこの「根源的経験」（すなわち「意識」）をもつという前提、また、読者は意識をもつと著者が言えば読者にはその意味が分かるという前提に立つことにしたい、と述べる。モーガンにとって、人間の「根源的経験」とは「意識」することであり、「意識」することは誰にとっても自明なのだから、これについて「定義」したり説明したりする必要はないことになるのだ。これは内容的に『文学論』冒頭における一節、「此講義に於て徒に此難語〔＝意識〕に完全なる定義を与へんと試みるの不必要なるを思ふ」という一節とも対応する。同時に、右に引用した『記録・東京帝大一学生の聴講ノート』における一節（而メ以下）とも基本的に同一であ

る。すなわち、どこから見ても、「文芸の哲学的基礎」における「意識」は、『文学論』における「意識」と同じく、直接にはモーガンの所説から出発しているのだ。

次に漱石が問題にした第二点、すなわち「意識の連続」という概念に移ろう。「連続」という概念は、ジェイムズが用いた「流れ (stream)」という比喩の中に含まれているとも言えるし<sup>34)</sup>、モーガンの言う「波」という概念に包摂されているとも言えよう。だがモーガンは、「連続」という言葉そのものを一種のキー・ワードとして用いている。モーガンは、我々は直接には「現在の状態の意識 (*present states of consciousness*) (イタリックは原文)」を知っているに過ぎないが<sup>35)</sup>、同時に「心的な波の連続性は疑いもなく意識するという経験の特徴なのである (Continuity of psychical wave is unquestionably a characteristic of our conscious experience...) (下線は漱石)」と説く<sup>36)</sup>。漱石手沢本では、この引用部分に濃い下線が引かれており、漱石が引用文の主語、すなわち「連続性 (Continuity)」に注目したことは、疑うべくもない<sup>37)</sup>。漱石の言う「意識の連続」が主としてモーガンに拠っていることは歴然としており、この面でもまた、モーガンを無視してジェイムズのみを強調するのは妥当ではあるまい。

## 10. 「私の正体」と「物我の区別」

漱石は美術学校の生徒を前にして、こう切り出す。自分は「此所に立つて居り」、「貴所方は其所に坐つて居られる」。すなわち「通俗」には、「此世界には私と云ふもの」があり、「貴所方と云ふもの」があって、それらが「広い空間の中」に居て、「此空間の中で御互に芝居を」して、「此芝居が時間の経過で推移」して、「此推移が因果の法則で纏められて居る」ように見える、と。だが、「退いて不通俗に考へて」みると、「それが頗る可

笑しい。」何故なら、「此私と云ふ——かうしてフロツクコートハイカラを着て高襟をつけて、髭を生やして儼然と存在して居るかの如くに見える、此私の正体が甚だ怪しい」からである。「フロツクも高襟も目に見える、手に触れると云ふ迄で自分でないには極つてゐる。此手、此足、痒ゆいときには搔き、痛いときには撫でる此身体が私かと云ふと、さうも行かない。痒い痛い申す感じはある。撫でる搔くと云ふ心持ちはある。然し夫より以外に何にもない」からである。では、「あるもの」は何か。それは、「便宜の為に手と名づけ足と名づける意識現象と、痒い痛いと云ふ意識現象」とである。「要するに意識はある。又意識すると云ふ現象はある。是丈けは慥」であり、「証明する必要もない」くらい明らかである。「して見ると普通に私と称して居るのは客観的に世の中に実在して居るものではなくして、只意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与へた」のだ、ということになる。

では、何故「余計な私と云ふものを建立するのが便宜」なのか。『私』と、一たび建立するとその裏には、(中略)私以外のものを建立する訳になって、「物我の区別が是で付」くからである(圈点原文)。かくして「吾人は(中略)我に対する物を空間に放射して、分化作用で之を精細に區別して行」くと同時に、「我に対しても亦同様の分化作用を發展させて、身体と精神とを區別」し、さらに「其精神作用を知、情、意、の三に區別」するからである(圈点原文)。これを簡潔に言い換えれば、「意識の連続」を「私」と名付けるのが重要なのは、これによって科学的認識を深めるのに不可欠な「分化作用」の第一歩を踏み出すからだ、ということになる。

以上に要約した問題との関連で、『比較心理学』第十七章「主体と客体(SUBJECT AND OBJECT)」を看過することはできない。ここでモーガンが論じるのは「私」ではなく「自己の意識(self-consciousness)」だが、モーガンによればそれは三つの要素を含んでいる。その一は、「主観的なものは客観的なものから明確に區別されていると考える作用(the con-

ception of the subjective as distinguished from the objective)」である。その二は、「主観的経験全体の最終結果を一つの一般的概念に纏め上げる作用 (the concentration of the net result of all subjective experience into one generalized concept)」である。その三は、「さらに、この最終結果は総合し選択する活動の明確な働きから生まれると考える作用 (the further conception of this net result as due to the determinate working of an activity which is synthetic and selective) (下線は漱石)」である。漱石はこの部分に下線を引き、余白にそれぞれ「1」、「2」、「3」という書き込みをしている。モーガンによれば、この三要素を含んでいるのが「最高度に発達した形式」をもつ「自己の意識」である<sup>38)</sup>。これを漱石の言葉と対照してみると、「意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与へた」という表現は「2」に呼応し、「物我の区別」という言葉は「1」を濃厚に反映しているのではないか。

更に、「此身体」について漱石が述べた言葉にも、モーガンとの対応関係が認められる。モーガンによれば、多くの人々は「自己」について前段に述べたほど正確かつ明晰な観念を持ってはいない。彼らは「身体 (the body) が自我 (the self) の一部なのか非我 (not-self) の一部なのか」を理解しないのである。彼らにとって、「自己とは客体から明確には識別されないままの人生経験の主体」である。子供や無学者がもつ自己の意識はきわめて漠然としていて、彼らは身体が「私 (me)」の一部だと考えるほどなのである<sup>39)</sup>。「此身体が私かと云ふと、さうも行かない」という言葉は、このようなモーガンの趣旨を踏まえて、「通俗」的な考えを否定したものである。

しかしモーガンは、「フロック」や「高襟」の類いについては何も述べていない。ところがジェイムズには、これに類する記述が見いだされるのだ。『心理学大綱』「第十章 自己の意識 (THE CONSCIOUSNESS OF SELF)」で、ジェイムズは、「経験的自己 (the Empirical Self)」、「社会的

自己 (the Social Self)」、精神的自己 (the Spiritual Self)」、純粋自己 (the Pure Self)」等々の側面に言及しつつ、多面的かつ網羅的に「自己」の問題を論じている。ここにはモーガンに影響を与えたと思われる部分も少なくないが、百頁に余るこの章の内容を簡単に要約することは到底不可能である。そこで、当面の問題と直接に関連すると思われる部分に限って一言しておく。それは「第十章」の「要約 (SUMMARY)」で、「自己 (Self)」を“I”と“me”と、すなわち「記憶」し「認識」する「私」と、その対象になる「私」とに分けている部分である。ジェイムズによれば、この意味での“me”の中核はその時そこに在ると感じられる「身体的存在 (the bodily existence)」であるが、過去の記憶の中であって、このような現在の存在感と酷似した感覚も、“me”の経験を構成していると見做される。時には、それ以外にある種のもものが“me”の構成要素と考えられることもある。「衣服 (clothes)」, 所有物, 友人, 名誉等々がその例である<sup>40)</sup>。漱石の言う「フロック」や「高襟」は、明らかにジェイムズが挙げた「衣服」や所有物に対応している。漱石は、モーガンの記述からジェイムズにおける“I”と“me”との区別を想起し、この意味での“me”なるものは厳密には「私」ではない、と念を押したのではあるまいか。

付言すれば、ここでジェイムズが考える“I”は様々な構成要素を集積し纏め上げた集合体ではあり得ない。心理研究を目的とする立場からは、“I”は「靈魂 (Soul)」といった形而上の実体とか、時間を超越した「純粋自我 (the pure Ego)」とか考える必要はなく、「思考 (Thought)」だとしなければならない (イタリックは原文)。“I”とは、刻々と変化しながら、しかも途切れることなく基本的同質性を保ちつつ流れていく「思考」そのものなのだ、とジェイムズは説く<sup>41)</sup>。ここで「思考」を「意識」と言い換えれば、ジェイムズの立場は漱石のそれとほぼ同一だと言うことができよう。しかし、『文学論』に言う「識末もしくは識域下にあるもの」を視野に入れると、「思考」と「意識」との間には容易には超え難い溝があ

ると考えざるを得ない。

かくして漱石は、「意識」の説明では主としてモーガンに拠りながら、必要に応じてジェイムズを援用し、分かり易い例を挙げつつ論を進めているように見える。こういう論法を採ったのは、主としてこの「論文」を発表した媒体の制約からであろう。「講演」の場合でも新聞の連載にしても、「随分むづかしい大問題」を論じるに際しては「さも容易さうに、従つてある意味から見て、幾分か軽佻に、講じ去」という方法を採らなければ、大方の興味を繋ぎとめておくことができないのだ。

いずれにせよ、漱石は以上のようにモーガンとジェイムズとを使い分けたのである。これに加えて漱石は、「意識」における「分化作用」を著しく強調した。これによって「物我」を「区別」したばかりでなく、「我」を「身体と精神」とに区別し、さらに「其精神作用を知、情、意、の三に区別」したのである。「分化作用」そのものは目新しい概念ではなく、「物我」の「区別」は、既に引用したモーガンの言葉、「主観的なるものは客観的なるものから明確に区別されていると考えること」というモーガンの言葉にも含意されている。「知、情、意」の「区別」に至っては、はむしろ陳腐とさえ言えるだろう。だが、「分化作用」によるこれらの「区別」は、後述するように、漱石独自の「理想」理論を樹立するにあたって不可欠な契機となるのだ。かくして漱石は、はモーガンやジェイムズを利用しながら、独自の領域を切り拓いていくのである。(未完)

## 注

- 1) 『文学論』とモーガンとの関係については、小倉脩三「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学の影響』(一)」(『国文学ノート』第30号, 1993), 「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学の影響』(二)」(同上第31号, 1994), 「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学の影響』(三)」(同上第32号, 1995), 「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学の影響』(四)」(同上第33号, 1996)が詳しい。本稿を草するにあたって、随時これらの論考を参照した。



- 2) Morgan, Lloyd. *An Introduction to Comparative Psychology* (London: W. Scott, 1894), pp. 146–147. なお下線付近の欄外には, “binocular vision” という書き込みがある。
- 3) 塚本『『文学論』の比較文学的研究』(吉田精一・福田陸太郎監修, 塚本編『比較文学研究・夏目漱石』, 朝日出版社, 昭和53年, 所収) 参照。
- 4) Morgan, op. cit., p. 71.
- 5) Ibid., p. 77.
- 6) Ibid. 引用文中第2行を “Like witherd leaves, to quicken a new birth;” または “Like withered leaves, to quicken a new birth!” と表記する版もあるが, ここではモーガンをそのまま引用した。
- 7) Ibid.
- 8) Ibid., pp. 77–81.
- 9) Morgan, op. cit., pp. 79–80.
- 10) モーガンの経歴等については, *An Introduction to Comparative Psychology* (1894), *Dictionary of National Biography*, Vol. LVII (Oxford University Press, 2004), *Encyclopedia of Psychology*, Vol. V (Oxford University Press, 2000), および *The Encyclopedia of Philosophy*, Vol. V (Collier-Macmillan Ltd., 1967) を参照した。
- 11) これは, ウィリアム・ジェイムズも1901年と1902年とに担当した講義である。『『文学論』本文の検討(二)』(『専修人文論集』第78号, 2006年3月) 参照。
- 12) 『比較心理学』「第三章異なった文化に属する民族の精神と高等動物の精神と (*Other Minds than Ours*)」参照。漱石手拓本では, この部分に下線が引かれている。Morgan, op. cit., p. 53.
- 13) *Encyclopedia of Philosophy*, Vol. V. (Collier-Macmillan Ltd., 1967), p. 392.
- 14) Morgan. op. cit., p. 214.
- 15) Ibid., p. 5.
- 16) Ibid., pp. 313–315.
- 17) Ibid., p. 315. モーガンは, 「ショーペンハウアーが意志という語を客観的側面にも用いたことはよく知られている」という脚注をつけている。
- 18) Ibid., p. 339. なお, 『比較心理学』「第十八章 意識の進化 (THE EVOLUTION OF CONSCIOUSNESS)」の最終部分に “synthetic synthesis” という表現が用いられているが (p. 332.), これは “selective synthesis” の誤りである。次章 (Chapter XIX SELECTIVE SYNTHESIS IN EVOLUTION) の冒頭 (p. 333.) に, “I SAID at the end of the last chapter, that in evolution we may see the continuous manifestation of a *selective synthesis*, … (イタリックは塚本)” とあり, 以下 “selective synthesis” の語が一貫して用いられている。
- 19) Ibid., p. 340.
- 20) Ibid., pp. 339–341.
- 21) Ibid., p. 341.

- 22) Ibid., p. 342.
- 23) Ibid., pp. 334–336. “departure” には「発展」, 「(過去との) 決別」といった意味もある。
- 24) Ibid.
- 25) Ibid., pp. 341–356. この第十九章でも, その前の第十七章でも, モーガンは「選択的かつ総合的傾向」が「活発に働いている (*active*)」ことを繰り返し強調している (イタリックは原文。Ibid., p. 341.)。
- 26) Ibid., p. 355.
- 27) “emergent” は, モーガンが G.H. Lewes (1817–78) から借用した言葉だとされている。
- 28) Morgan, op. cit., p. 1. ここでモーガンは, “First of all, I accept a *monistic theory of knowledge* (イタリックは原文)”. と宣言している。
- 29) Ibid., p. x.
- 30) ジェイムズは, *The Principles of Psychology* で第九章に “THE STREAM OF THOUGHT” という表題を用い, 後にこれを簡略化した *Psychology, Briefer Course* (1891) では “The Stream of Consciousness” (第十一章) という表題に変えた。どちらの場合も “wave” を用いていない以上, モーガンが「意識の波」という表現そのものをジェイムズから借りたはずはあり得ない。ただ『心理学大綱』でジェイムズは「思考 (*thinking*)」を「あらゆる形式の意識 (*every form of consciousness*)」の意味に用いるとしており (224頁), また, “*In talking of it hereafter, ... let us call it the stream of thought, of consciousness, or of subjective life.*” とも述べているから (239頁。イタリックは原文, 太字のみ塚本), 「意識の流れ」という用語は既に『心理学大綱』で用いられていたとも言えよう。とすると, モーガンは “*the stream of thought, of consciousness*” を誤って「意識の波」としたのかもしれない。だがそれよりは, *Psychology, Briefer Course* でジェイムズが一貫して用いた「意識の流れ」をモーガンが「意識の波」と誤った可能性が高いのではないか。ジェイムズがこの新著を世に問うたのは, モーガンが「序」を脱稿した1894年の僅か3年前だったのだ。ただ, 「意識」への関心はジェイムズに始まるわけではなく, ジェイムズ自身が Shadworth Hodgson (1832–1912) 著 *The Philosophy of Reflection* (1878) における “the chain of consciousness” という表現に言及し, 「連鎖」という語が不適切な所以を強調している (p. 230)。また, スペンサーとジェイムズ以外にモーガンが謝意を表しているのは, Professor Romanes (1848–1894。カナダ生れの進化論的生物学者) と Professor Mivart (1827–1900。イギリスの動物学者) との二人である。
- 31) 金子三郎 (編) 前掲書, 305頁。
- 32) 同上。
- 33) Morgan, op. cit., p. 11.
- 34) ジェイムズは「思考における五つの特性 (FIVE CHARACTERS IN THOUGHT)」

を挙げたが、その第三で “Within each personal consciousness thought is sensibly *continuous*.” と述べている (225頁。イタリックは塚本)。

35) Morgan, op. cit., p. 11.

36) Ibid., p. 21.

37) その他の例を二、三挙げれば, “...we may say that the *continuity* which is characteristic of our conscious experience, is conditional on our continued existence as living organisms. (Morgan, op. cit., p. 35)”, “The *continuity* of all our impressions and ideas is of like order to the continuity of the meteor track. (Ibid., p. 100)”, あるいは “It is this overlap which is one factor in giving *continuity* to such process, and to consciousness and thought in general, (Ibid.)” 等々がある。モーガンはまた, “continuity” の同義語として “sequence” をも用いている (e.g., ...the fact that we have something more than a *sequence* of states of consciousness...[Ibid., p. 314])。なお引用文中の下線は漱石, イタリックは塚本。

38) Morgan, op. cit., p. 317.

39) Ibid., pp. 317–318. なお, ここでモーガンが用いた “me” の内容は, 以下に述べるように, ジェイムズが用いた “me” のそれとは異なっている。

40) James, *The Principles of Psychology*, Vol. I (Dover Publications Inc. 1918), p. 400.

41) Ibid., p. 400–401. なおジェイムズは, “The theory of the Soul” や “Transcendentalist Theory” については, それぞれ342頁以降および360頁以降で綿密な批判を加えている。